



バロックと現代文明の転換

新世紀から既に6年。世紀の節目は拍子抜けするくらい大事変もなく20世紀末の延長線上にあった。

しかし、私はこの十数年の流れは数百年オーダーで見た大変化のただ中に居るといった感覚が常にある。

この間、イタリア南部やメキシコそして昨年はロシアのバロック都市を巡ってきたが、その圧倒的な空間体験は街並み、建物、内部空間とそこに設えられた彫刻、絵画等と一体となって今の人々の生活に融け込んで存在している。まるで、私達後世の者はこの完成された世界を乗り越えることなど不可能だとも言われているようだ。

16〜17世紀は芸術分野の統合化、科学技術や哲学革命との連動、そして大衆化などが指摘されるが、それこそ現代の状況と全く同じではないか。

浮世(岩佐)又兵衛の福井時代(1615年)の絵巻物や洛中洛外図屏風舟木本等も西欧との同時代性を考えると、日本のバロックと言っても差しつかえないように思う。現実社会を直視し、リアルかつ観客を巻き込む臨場感のある表現は新しい観客層としての戦国武士や大商人の好む所であり、往時の大衆教化のためのカソリック美術やフランドル絵画と通じる所もある。

昨年、社会現象ともなった越後妻有アートトリエンナーレ。そこで北川フラム氏のアーティスト、ボランティア、地域住民が渾然一体となった不思議なコミュニティに出会った。バロック期の最先端芸術としての都市計画やオペラ、ページェント等のプロジェクトに近いものを感じた。

本のバロックは同時に渡辺京二氏の言う「パックス・トクガワーナ」を準備する中世から近世への大転換点であり、世界史における近代化の第2局面であり、現代はその第3局面に入ろうとしている(公文俊平)という立論に少なからず心を動かされている。皆様はいかがお考えでしょうか。

さて、弊社は近年、地を這うようなまちづくりの現場や大学や企業人の地道な聞き調査をベースに地域産業、科学技術、国土計画といった政策論にも関わっている。またまた「御社は何が専門ですか」と聞かれそうになるが、昔から「頼まれたことは時間さえあれば何でもやります。その上で私達ができるのはこの部分です」というやり方を今年も継続しようと思います。スタッフにも専門技術だけではなく何でもいろいろな角度から自由に考え、誠実にやろうと言っております。

本年もどうぞよろしくご指導ご鞭撻下さいますよう、伏してお願い申し上げます。

平成十九年 元旦

DAN計画研究所 代表取締役社長

吉野国夫

JANUARY 2007

VOL.
18